

失念しました

下村鴻一郎

埼玉県・七四・会社員

本日あえてペンをとったのは、和ちゃんの花嫁姿を夢に見たからです。それも体格のよい好男子とともに……。女性に初めて手紙を誌すのに勇気を要する僕を意気地なしと言わないでください。

いつだったか、和ちゃんは梅の香が大好きと言われたことを思い出しました。歌人の名前は失念しましたが、

梅の香ぞ 君をつつむに ふさわしき 美と力との しるしにてあれば

という短歌を想い出すとともに、和ちゃんも僕もいわば戦前派——口に出して「好き」だとか「愛する」などといったことは禁句の教育を受けて来ただけに、こうしたことに対しては一種の精神的脚気ともどかしさを痛感しています。

それにわが家の家紋は梅鉢というのも、因縁浅からぬものがあるように思えてなりません。初めて和ちゃんを知ったのは『家の光』という雑誌に掲載されていた記事で、

それは生育した外地——朝鮮半島から初めて内地の土——利根川べりの親戚を訪ねた折のことでした。その足で群馬の和ちゃんの家をお伺いしたのは、忘れもしない東京の空の彼方が真紅の炎で燃えた東京空襲の三月一〇日の夜でしたね。

終戦引揚後、徳富慮花の文学に心酔していたとはいえ、慮花ほどの文才のない僕からだと全体でみみずが大地をのたうつかの要領悪さで書こうと決心、この開拓地に帰農しましたがどうやらその見通しも出て来ましたので、今回結婚を申し込みます。

好便を鶴首かくしゅします。よろしく……。

言の葉の すくなき愛の 根はふかく

たっかいの火を しのぎてつよし

昭和二五年二月吉日

下村鴻一郎

田村和子様